

上郷町埋蔵文化財発掘調査報告書第16集

# 原の城 A 遺跡

—農村基盤総合整備事業原の城支線1号改良工事  
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

1989. 3

長野県下伊那郡上郷町役場産業課  
長野県下伊那郡上郷町教育委員会

## 序

昭和53年度から農村基盤総合整備事業を黒田地区に於いて継続実施中であります、昭和63年度事業として原の城支線1号（延長231m・幅員4.5m）を計画しました。

当地区は丘陵地であり、原始・古代に於いては温暖な居住地として適地であったろうと推測され、埋蔵文化財包蔵地に指定されており、また眺望の良いところでもあり、中世においては見晴山を含めた城跡でもあったため、工事に先立ち町の教育委員会と協議して、発掘調査を実施しました。

調査は農道改良のため、道路敷部分に限られたので全貌を掴むには困難な面もあると思われました。しかし、詳細については調査報告書にもありますが、弥生時代の住居址や近世の陶磁器がたくさん出土した溝があるなど、一定の成果が得られました。

今年度は土木工事量も多く、それに伴い調査箇所も多量であり大変ご多忙のなか、大勢の関係者の方々のご尽力により、農道改良工事が順調に進みましたことに対して深く感謝申し上げ、遺跡が末長く記録保存できることにつきましても御礼申し上げます。

平成元年3月

上郷町長 山 田 隆 士

## 例　　言

1. 本書は、農村基盤総合整備事業原の城支線1号改良工事に伴う上郷町黒田「原の城A遺跡」の緊急発掘調査報告書である。

2. 発掘調査は上郷町教育委員会が実施した。

3. 発掘調査・整理作業等はH R N Aの記号によって実施した。

4. 本書は昭和63年度中にまとめることが要求されており、資料呈示に主眼をおいて編集した。

5. 本書を作成するにあたっての作業分担は以下のとおりである。

遺構実測・図面修正—吉川金利　　遺構製図—市瀬禎子　　遺構写真—山下誠一、吉川金利

遺物実測・製図—吉川金利、市瀬禎子　　遺物写真—吉川金利

6. 本書はI、II、III-1の2)・2、IVを山下誠一、III-1の1)を吉川金利が執筆し、編集は山下誠一が行なった。

7. 本書に関連した遺物及び記録・図面類は、上郷町教育委員会が管理し、上郷町歴史民俗資料館で保管している。

## 本文目次

序	
例 言	
I 経 過	1
1. 調査に至るまで	1
2. 調査の経過	1
3. 調査組織	2
1) 調査団	2
2) 事務局	2
II 遺跡の立地と環境	3
1. 自然的環境	3
2. 歴史的環境	7
3. 層 序	8
III 調査結果	11
1. 造 構	11
1) 第 I トレンチ	11
① 1号住居址   ② ピット   ③ その他	
2) 第 II トレンチ	15
① 溝址 1	
2. 造 物	15
① 繩文時代   ② 弓生時代   ③ 近世	
IV まとめ	19
後 記	45

## 挿 図 目 次

挿図 1 原の城 A 遺跡位置図	4
挿図 2 原の城 A 遺跡発掘位置図及び周辺図	5・6
挿図 3 第 I トレンチ土層図	9
挿図 4 第 I トレンチ・第 II トレンチ全体図	10
挿図 5 1号住居址	12
挿図 6 第 I トレンチ P5・P6	13
挿図 7 第 I トレンチ P1・P2・P3・P4、耕作溝	14
挿図 8 第 II トレンチ溝址 1(1)	16

## 図 版 目 次

第1図 第Iトレンチ 1号住居址・第IIトレンチ出土遺物	20
第2図 第IIトレンチ 溝址1出土遺物(1)	21
第3図 第IIトレンチ 溝址1出土遺物(2)	22
第4図 第IIトレンチ 溝址1出土遺物(3)	23
第5図 第IIトレンチ 溝址1出土遺物(4)	24

## 写 真 図 版 目 次

図版1 遺跡遠景(北西より望む) 第Iトレンチ調査前(北東から)	25
図版2 第IIトレンチ調査前(北西から) 第IIトレンチ調査前(南東から)	26
図版3 1号住居址 1号住居址炉址	27
図版4 第IトレンチP1・P2 第IトレンチP3	28
図版5 第IトレンチP4 第IトレンチP5	29
図版6 第Iトレンチ耕作溝 第Iトレンチ全景(南西から)	30
図版7 第IIトレンチ溝址1(北西側) 第IIトレンチ溝址1(北西側)	31
図版8 第IIトレンチ溝址1(中央部) 第IIトレンチ溝址1(部分)	32
図版9 第IIトレンチ溝址1(部分) 第IIトレンチ(南東側)	33
図版10 第IIトレンチ(北西側) 第IIトレンチ全景(北西から)	34
図版11 溝址1碗 溝址1碗	35
図版12 溝址1碗 溝址1碗	36
図版13 溝址1陶器 溝址1陶器	37
図版14 溝址1碗 溝址1碗 溝址1碗	38
図版15 溝址1碗 溝址1碗 溝址1碗	39
図版16 溝址1碗 溝址1碗 溝址1碗	40
図版17 溝址1碗 溝址1碗 溝址1德利	41
図版18 溝址1小壺 溝址1仏龕具 溝址1仏龕具	42
図版19 溝址1仏龕具 溝址1擂鉢 溝址1擂鉢	43
図版20 重機による第Iトレンチ掘り下げスナップ 第IIトレンチ調査スナップ	44

# I 経 過

## 1. 調査に至るまで

昭和63年度において、上郷町役場産業課が実施する農村基盤総合整備事業で農道原の城支線1号の拡幅改良が計画された。当該地は原の城A遺跡の中心部に当たるため、昭和63年6月30日に産業課と上郷町教育委員会の担当職員による保護協議を実施した。その結果、遺跡が破壊されることが余儀なくなつたために、発掘調査を実施して記録保存を図ることとした。

調査は工事施工前の8月に行なうこととなつたが、農繁期における発掘のため、耕作に影響を及ぼすことを避ける必要があった。地権者との調整が終了した7月15日に、文化庁あての埋蔵文化財発掘調査の通知を提出した。

## 2. 調査の経過

発掘対象は改良される原の城の台地を横断し曲がって台地肩の部分を縦断する農道部分に限られた。かつ、耕作用に使用されている道であるので、効率的な調査が必要であった。そこで、重機を使ってトレントを設定し、遺構などを検出した場合に拡張して調査するように計画した。

昭和63年8月18日に、ミニバックホーを導入して台地を横断する部分にトレントを設定し、第Iトレントとする。引き続き縦断する部分に第IIトレントを設定する。午後に作業協力員を使った本格的な調査を開始する。遺構検出面まで掘り下がつたので、順次遺構の検出を実施し、1号住居址とした竪穴住居址とピットを確認した。

8月19日に、第Iトレントで検出された遺構の掘り下げを実施し、竪穴住居址部分を拡張することとして、調査の主力を第IIトレントに移す。重機が取り残した上土を除くとすぐに砂の入る溝を検出して調査する。

8月20日に、溝址の掘り下げを続け、近世陶磁器が多量に検出された。トレントで把握できたのは一部でしかなかったが、時期が近世以降であるとの調査地南西側が高い土手となっていて拡張が困難だったので、これ以上広げて調査はしなかった。

8月21日に、拡張した1号住居址の調査を実施し、測量・写真などを済ませ、住居址部分の埋め戻しを行なつて現場における全ての作業を終了し、次の調査地である大明神原遺跡へ発掘機材を移動する。

その後、他遺跡の発掘調査や整理作業が山積していたので、それらがほぼ終了した3月になつて整理作業を実施して、原稿を執筆して本報告書刊行となった。

### 3. 調査組織

#### 1) 調査団

調査担当者 山下 誠一  
調査員 吉川 金利  
調査補助員 市瀬 穎子  
作業協力員 東 定男 井坪 芳一 北林 覚男 小西 広司 下沢 貞満  
菅沼 庄三 宮脇 直人 麦島 孝男 山岸 章 吉川 佐一

#### 2) 事務局

吉川 昭文（教育委員会教育長） 北原 克司（産業課課長）  
菅沼 富雄（教育委員会事務局長） 中園 紘（産業課耕地係長）  
吉川 勝一（教育委員会事務局長補佐） 今村 美和（教育委員会社会教育係）  
山下 誠一（教育委員会社会教育係）

## II 遺跡の立地と環境

### 1. 自然的環境

原の城A遺跡の所在する長野県下伊那郡上郷町は、長野県の南端を南北に走行する南・中央両アルプスの谷間に広がる飯田盆地の中央部に位置する。町を象徴する野底山が北西にあり、そこを源として清流野底川と土曾川南流し、飯田松川と天竜川に注いでいる。町の東側には天竜川を境として喬木村が、西は野底川を挟んで飯田市街地が、南は松川を境界として飯田市松尾が、北は野底山と土曾川によって高森町と飯田市座光寺がそれぞれ隣接する。面積は約26 km<sup>2</sup>で東西に細長い緩傾斜の地域である。一帯は諏訪湖に源を発して南流する天竜川とその支流によって形成された河岸段丘や扇状地上に、往古から現在に至る人々の生活舞台が展開している。

『下伊那の地質解説』によれば、伊那谷の段丘は火山灰土の堆積を基準として、高位面・高位段丘・中位段丘・低位段丘Ⅰ・Ⅱに大きく編年されている。上郷町の地形の特徴として、町の中央部を南北に横断する大段丘があり、これを境として俗に上段（うわだん）と呼称される洪積土壤地帯の中位段丘および低位段丘Ⅰと、下段（しただん）と呼ばれる沖積土壤面の低位段丘Ⅱとがみられる。その段丘崖の比高は約50 mあり、前者には黒田地籍が、後者には別府・飯沼地籍がある。中位段丘・低位段丘Ⅰ地帯は天竜川の現河床面海拔398 mとの比高差200～80 mを測り、野底山山麓から南東方向に緩やかに傾斜する広大な地域を占めている。野底川による新期扇状地が発達し、総体とすれば乾燥した台地をなしている。ちなみに、中位段丘・低位段丘Ⅰ地帯は三大別でき、南東側に原の城A遺跡などがある中位段丘下殿岡面、北東側に大明神原遺跡が立地する中位段丘八幡原面があり、いずれも細長く小高い丘陵地形を呈している。この間の地域が低位段丘Ⅰ伊久間面で2×1 kmの広い範囲となる。

原の城A遺跡は上郷町黒田字原の城に所在し、中位段丘下殿岡面の海拔538～545 mに立地する。上段の南西側に原の城台地と呼称される、南東側に緩やかに傾斜する長さ700 m・幅100～200 mの細長く小高い丘陵があり、本遺跡はこの台地北西端部200×120 mの範囲を占める。微地形をみると、南西側は比高差25 mを測る段丘崖となり、北東側は比高差10 mでやや緩やかな傾斜をなしている。北西側は今村遺跡の立地する台地に連続し、南東側は原の城B遺跡が所在する通称見晴山へと続いている。南西側の段丘崖下には見城垣外遺跡、北東側は凹地帯を挟んで増田遺跡が所在する。

現地目は果樹園が主体となるが、宅地化の波が押し寄せており、徐々に遺跡が蚕食されており、今後は注意が必要である。



挿図1 原の城A遺跡位置図 (1 : 50,000)



挿図2 原の城A遺跡発掘位置図及び周辺図 (1 : 5,000)

## 2. 歴史的環境

上郷町全体を通した歴史的環境はこれまでの報告書に詳しいので省略し、原の城に関する部分を触れてみたい。

原の城には、原の城A・原の城B兩遺跡と原の城跡がある。昭和57年度で実施した詳細分布調査の結果によると、それ以前に飯田高等学校考古班が実施した分布調査をふまえて、原の城A・遺跡では、縄文時代中期の勝板式土器片・打製石斧・磨製石斧・弥生時代後期土器片・平安時代土師器片・須恵器片、中世陶磁器片、原の城B遺跡では、縄文時代中期土器片・打製石斧・弥生時代後期土器片・平安時代土師器片・須恵器片、中世陶磁器片があるとされている。これを見れば、原の城台地に人類が最初の足跡を記したのは今から5000年前の縄文時代中期ということになる。しかし、あくまでも表探による結果だけであり、それ以前の縄文時代草創期・早期・前期やさらに旧石器時代の遺構・遺物が残されている可能性は否定できない。

弥生時代後期は土器片が採集され、爆発的に遺跡数が増加し、特に乾燥した洪積土壌の上段地帯に顕著に認められるという当地方の弥生時代後期と符合する。調査結果で詳述するが、今次調査でも該期の竪穴住居址が検出され、さらに、隣接する今村遺跡では、昭和62年度で実施した農道の新設工事に先立つ発掘調査において、弥生時代後期の竪穴住居址や方形周溝墓の周溝である可能性が高い溝址が検出されている。

古墳時代は下段の沖積地帯に中心がみられるので、ほとんどその痕跡をうかがうことはできない。奈良・平安時代は遺物が表探されているので集落址がどこかに残されている可能性は高い。

中世になると、原の城跡が構築される。丘陵全体を空堀で区画し、本郭・二之郭・三之郭・四之郊・五之郭・六之郭等がみられるが、宅地化が進んでおり、次第にその痕跡が失われつつあるので、早急な保護措置が必要である。原の城A遺跡はその五之郭部分に相当する。起源や歴史については不明であるが、上郷史によると小笠原長秀旗下の黒田氏が室町時代応永年間から永享年間まで40～50年はいたと推定している。

明治時代になると、明治7年に今次調査地の付近を中心として、明治5年に発布された学制発布に伴う黒田学校を建設し、明治19年の座光寺学校黒田分校・明治22年の上郷尋常高等小学校黒田分校・明治23年に上郷西小学校と、上郷尋常高等小学校が現在の上郷小学校の場所に統合されるまで、名称を変えながらも一貫して利用してきた。現在はその痕跡はほとんどとどめおらず、当時に使っていた井戸が今次調査地北西側の桃畠の中に残っているのみである。

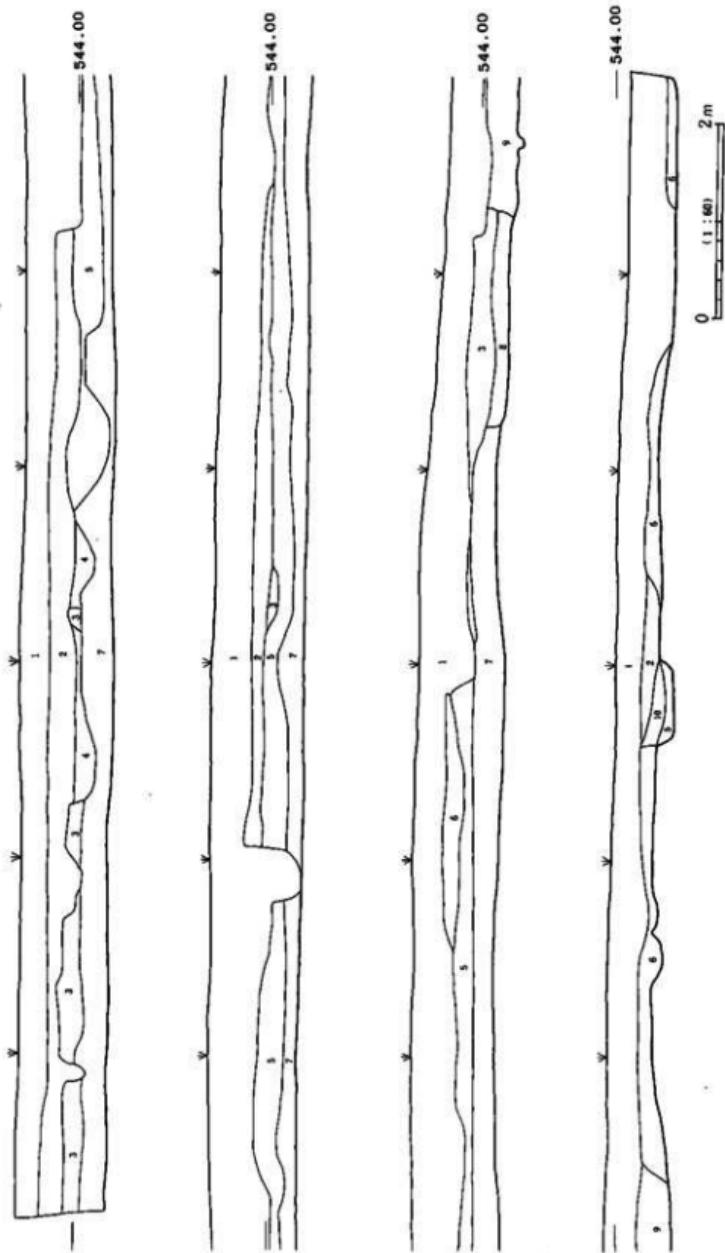
以上のような自然・歴史的環境の中に本遺跡は立地しているのである。

### 3. 層序

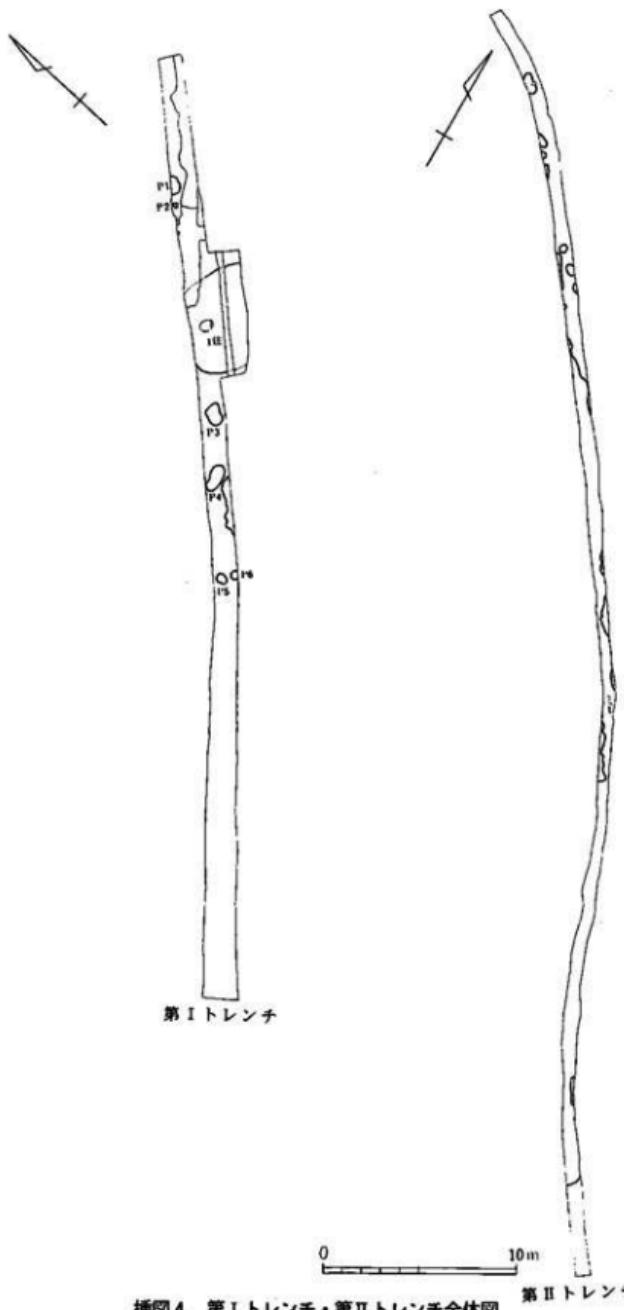
第Ⅰトレンチ北西側の土層図を挿図3で示し、説明を加える。上段の左側が南西端で、下段の右側が北東端である。

- 1層：暗灰色砂質土
- 2層：灰色砂質土
- 3層：黒色土
- 4層：灰色砂質土（黒色土混じり）
- 5層：灰色砂質土（黒色土・褐色土混じり）
- 6層：小石（灰色砂質土混じり）
- 7層：褐色土
- 8層：暗褐色土
- 9層：灰色砂質土（黒色土・暗褐色土・ローム混じり）
- 10層：灰色砂質土（褐色土混じり）

1層は現在の耕土で、台地上の土にしては砂っぽい。2・4・5層や灰色砂質土を基本としている。これは本来原の城台地に存在するものなく、学校建設に伴う敷地造成で運び込まれた土と考えられる。こうした土によって耕土も砂っぽくなつたのであろう。9・10層や6層の小石も同様に学校造成に関連するのであろう。3層は台地中央部の南東側に多く認められた。本来は全体に堆積していたのであろうが、敷地造成で大部分は削平され、深い中央部に多く残ったものと考えられる。この層に縄文時代後期の土器が若干包含されていた。7層はローム層の上にあり、下層が遺構検出面となる。全体に、台地中央部の南東側が遺構検出面まで深く、北東側の先端部が浅い。造成やその後の耕作の擾乱を受けており、良好な残存状況は示していない。なお、第Ⅱトレンチは薄い耕土の下がすぐローム層となり、後述する溝址1が検出できた。よって土層図は示してない。



插図3 第I トレンチ土層図



挿図4 第Ⅰトレンチ・第Ⅱトレンチ全体図

### III 調査結果

#### 1. 遺構

##### 1) 第Iトレンチ

事業内容が農道の拡幅改良ということで、調査は対象となる農道上に第Iトレンチ・第IIトレンチと2本のトレンチを設定する形で行なわれた。

第Iトレンチは、原の城の台地を横断する農道上に長さ約45m・幅約1.5mで設定し、住居址拡張部分を含めて77.3m<sup>2</sup>を調査した。

###### ① 1号住居址（挿図5・第1図）

トレンチ北東寄りで一部が検出され、可能な限りトレンチを拡張し住居址の約半分を調査した。住居址北側が耕作溝に切られ、床面上部まで耕作等で擾乱されて住居址平面形の把握が推定の域を脱し得ないが、プランは隅丸方形を呈する。規模は、主軸に直交する方向が4.5mで、主軸方向はN 62°Wを示す。壁高は11～6cmを測り、やや緩やかな壁面をなす。床面はロームまで掘り下げられており、堅いたたき状で一部を除き良好なものである。図中の破線範囲は床面不良の範囲を示す。主柱穴はP1・P2が確認され、柱掘り方が梢円形を呈することより柱に割り材を使用したと考えられる。P3・P4は住居施設には直接関係しないものと思われる。炉址はP1の北側に位置する炉縁石を有する地床炉で、床面を68×56cmの梢円形に掘り凹め、南東に3個の石を配置したものとなっている。焼土が厚さ6cmほど炉縁石北西側に確認された。

遺物は、土器・石器があるが、出土量は極めて少なかった。

土器は炉址より弥生土器壺破片が1点出土したが、図化・拓影はできない。

石器は打製石斧（1-7）のみであり、P1と炉址の中間ほぼ床面直上より出土した。

本址は時期決定の要素にかなり欠けるが、住居址形態等より弥生時代後期に位置づけられる。

###### ② ピット（挿図6・7）

トレンチ中央部から北東側にかけて6個のピットを検出した。全てのピットから遺物は出土しておらず、時期・性格等不明である。

P1は調査範囲外にかかり、全てを調査できなかった。梢円形を呈すると思われ、南西・北東方向で90cmを測る。深さは最深部で25cmを測り、断面は逆台形を呈し、底部には凸凹がある。

P2はP1の南西側すぐ近くにあり、24×22cmの梢円形を呈する。深さは不明である。断面は逆台形を呈する。

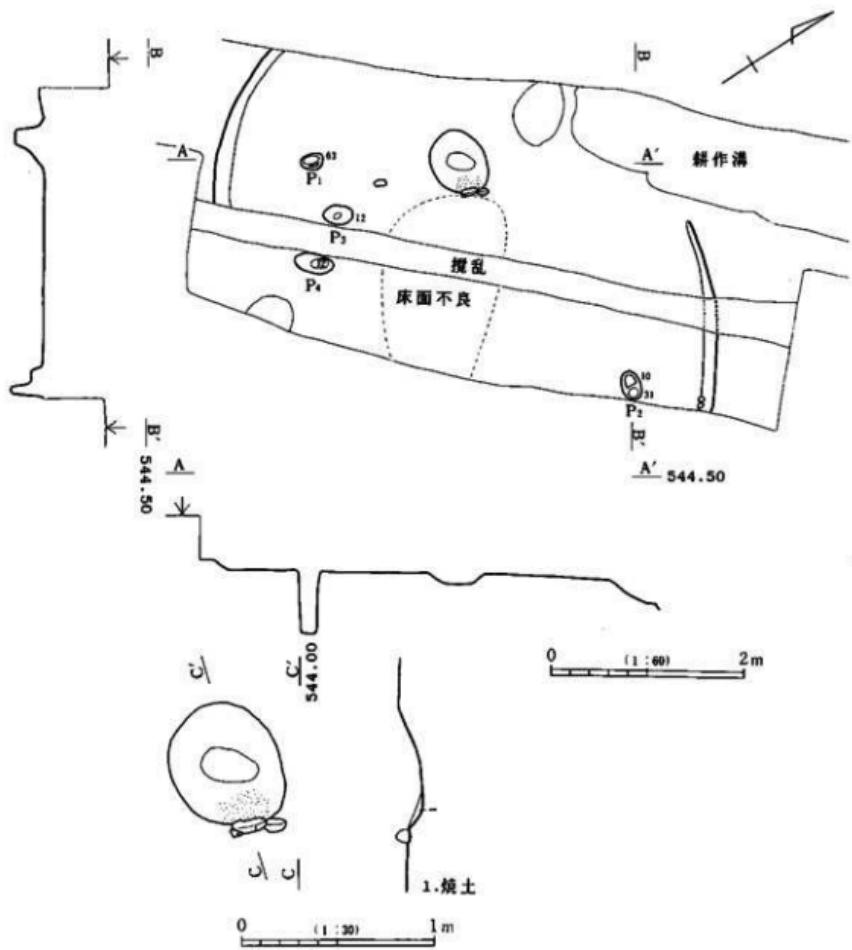


插图5 1号住居址

P 3は1号住居址の南西側にあり、 $102 \times 66$  cmを測る深さ19 cmの不定形ピットで、断面は浅い逆台形を呈する。

P 4はトレンチ中央やや北東にあり、 $140 \times 69$  cm不定形を呈する。深さは19 cmで、逆台形の断面を呈するものである。

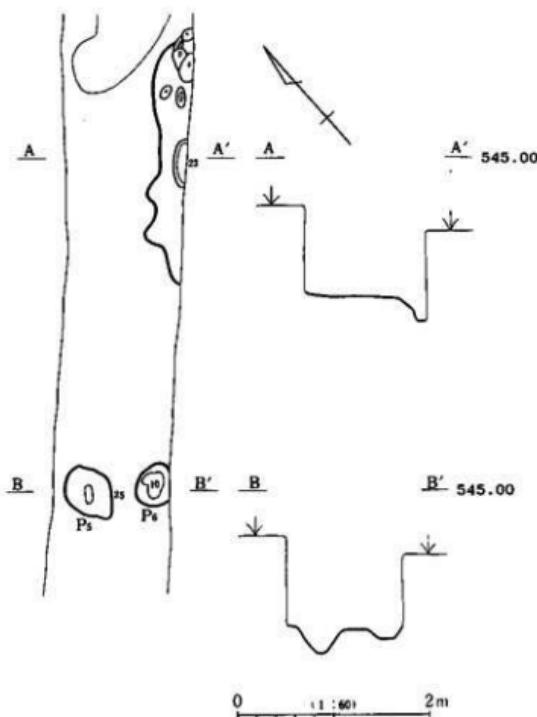
P 5はトレンチ中央にあり、橢円形を呈するピットで、 $63 \times 46$  cm・深さ25 cmを測る。断面は底部がやや平坦になる逆三角形を呈する。

P 6はP 5の南東側にあり、一部が調査範囲外にかかる。 $46 \times (20)$  cm・深さ10 cmを測る橢円形を呈すると思われるピットで、底部は不定形であり断面は逆台形である。

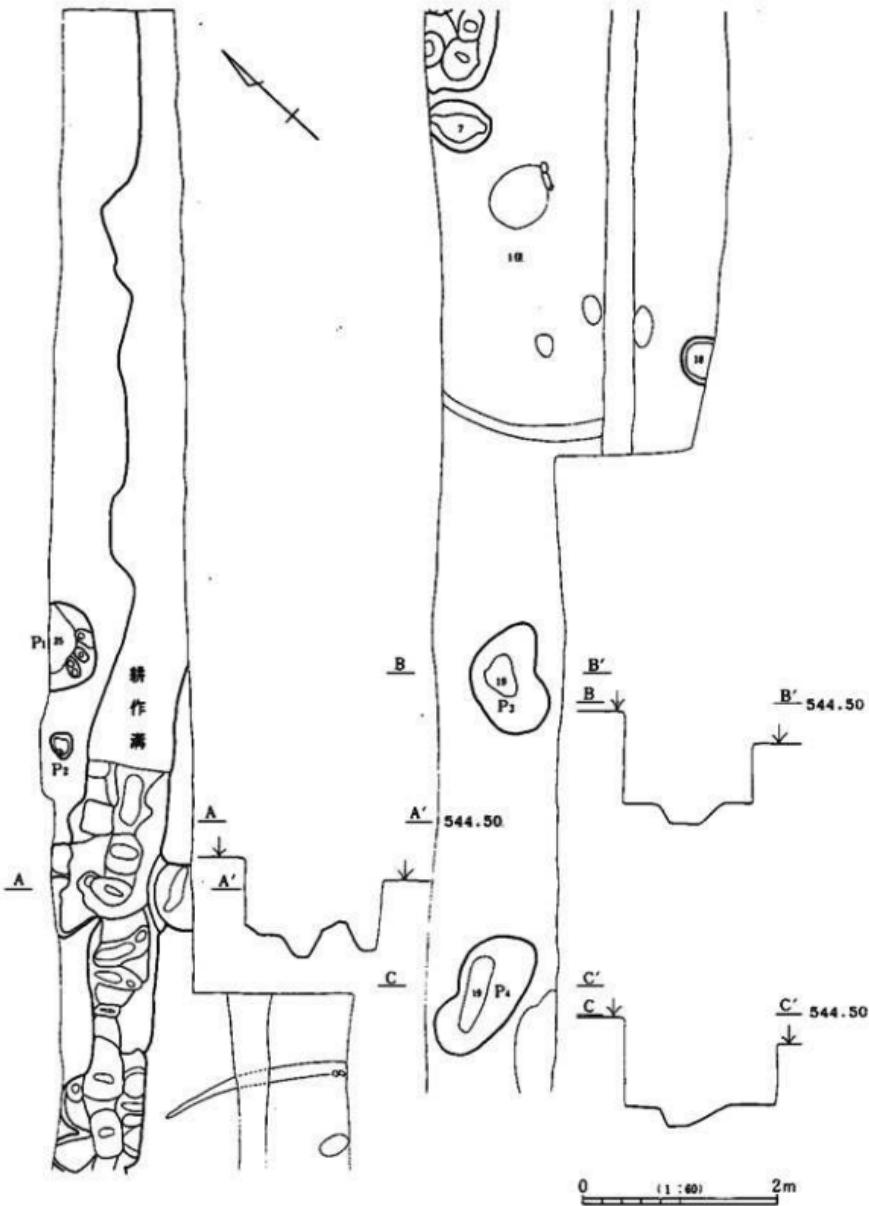
③ その他（挿図6・7）

P 3の南側に落ち込みを検出したが、全容が把握できず、詳細は不明である。

1号住居址北西側から東側の方向に延長する構作の擾乱による溝がある。一部掘り下げたが、底部は凹凸があり、形状は一様でない。



挿図6 第Iトレンチ P 5・P 6



揮図7 第Iトレンチ P1・P2・P3・P4、耕作溝

## 2) 第IIトレンチ

第IIトレンチは北東側に落ち込む肩の部分に沿って長さ約65m・幅約80cmで設定し、調査面積は約52m<sup>2</sup>である。北東側は傾斜をもって落ち込んでいて、南西側は造成を示す高い土手となっており、事前には遺構があるとは予想できなかったが、念のためトレンチを設定することにした。溝址を1本検出した。

### ① 溝址1(挿図8・9)

第IIトレンチほぼ全体にかかって検出した。調査延長は約47.5mで、両側に延長する。調査した幅が狭いため、全体の状況を明らかにできないが、南東側の端で南の方向に曲がると考えられる。調査箇所での方向はN 22° Eを示す。幅は落ち込みの肩を検出できた部分が限られるため不明であり、深さは40cm以上で深くなる箇所がある。断面は不定形で、水流によって抉られたりピット状になったりしている。覆土はほとんど灰白色砂土で、細かい堆積をなしている。遺構の状況から自然の流路である。

北西側には8箇所にピット状の落ち込みが認められる。覆土は溝址と同様に灰白色砂土であり、溝址の底の部分が残ったもので溝址1と一連であると考えられる。

出土遺物は、底のロームとの境の部分を主体として近世陶磁器が多量に出土した。完形品ではなく廃棄したものと考えられるが、ほかに近世の遺構はなく、どうした状況で捨てられたのか確認できなかった。ほかに縄文・弥生時代の石器がある。

出土遺物から近世に位置づけられる。

両側が高い土手と傾斜地という制約があるうえ時期が近世であることから、拡張しての調査は行なわなかった。

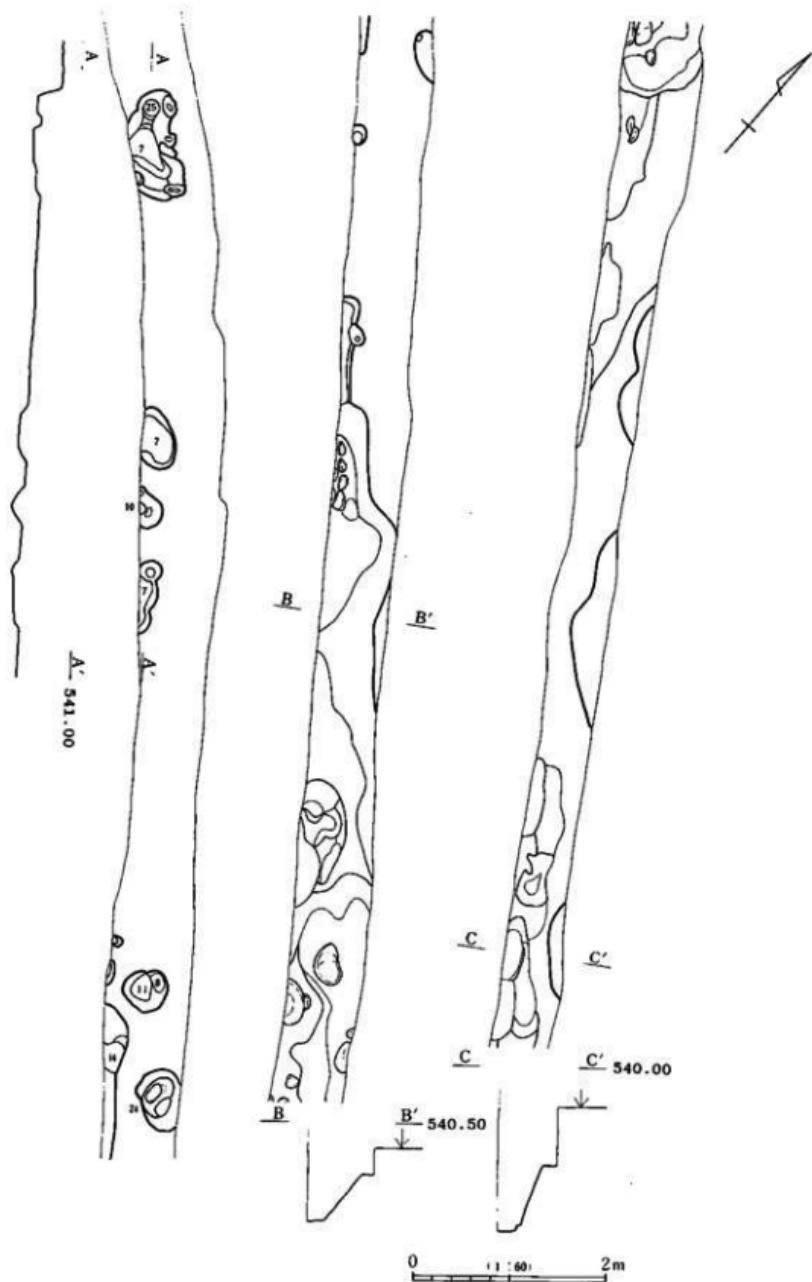
## 2. 遺 物

縄文時代・弥生時代・近世の遺物がある。ほとんどは溝址1から出土した近世陶磁器である。時期ごとに説明する。

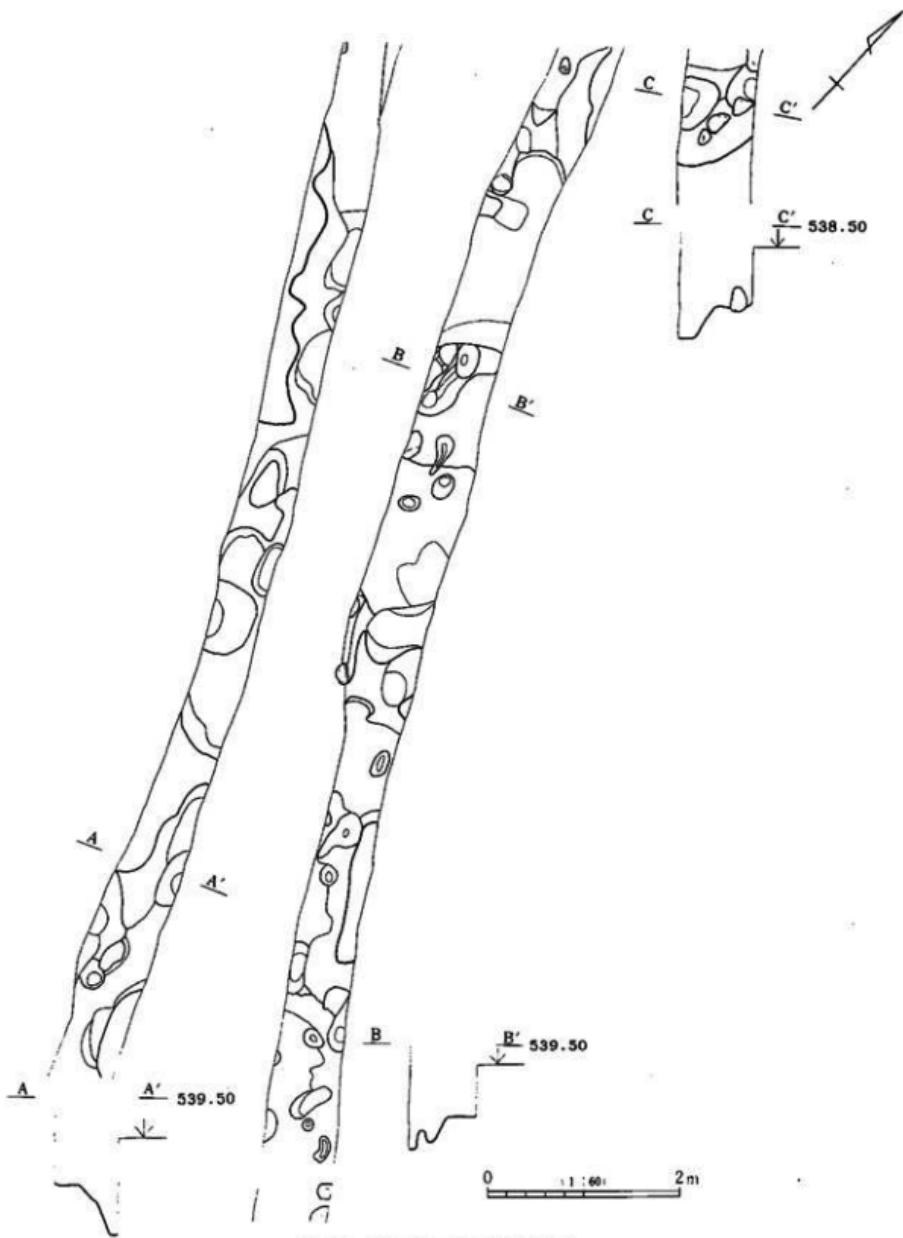
### ① 縄文時代(第1図)

土器は、択影で示すことができる破片が4点(1~4)ある。全て第Iトレンチ南東側の黒色土から出土した。縄文に沈線が施される深鉢(1・2)、太い沈線をもつ深鉢の口縁部(3)、沈線が施される深鉢の底部(4)があり、全て縄文時代後期前半に位置づけられる。

石器は溝址1から出土した打製石斧(8・9)が形態から該期のものと考えられるが、打製石斧は弥生時代とほとんど形態差がみられないため、確実ではない。



挿図8 第IIトレンチ溝址1(1)



插図9 第IIトレンチ溝址1(2)

### ② 弥生時代（第1図）

土器は、第Iトレンチから出土した後期前半の斜走短線文の施される壺片（5）と、第Iトレンチ褐色土出土の同時期と考えられる壺片（6）がある。

石器は、1号住居址出土の打製石斧（7）と溝址1から得られた有肩扁状形石器（10）が該期のものである。

### ③ 近世（第2～5図）

いずれも第IIトレンチの溝址1およびピットから出土した。完形に復元できるものや形態が珍しいものを選択して図化したので、すべての個体を示したわけではない。しかし、全体の傾向は明らかにできたと考えている。1点がカワラケのほかは全て陶磁器であり、碗・皿・徳利・蓋・鉢・擂鉢・壺・仏龕具等がある。

カワラケ 小型の皿（2-1）である。

碗 最も出土量が多い。陶器と磁器があり、形態で4器種に分類できる。

ゆるやかに内湾して立ち上がるもの（2-2～6）、内湾して立ち上がり口縁部がわずかに外反するもの（2-8～11）、底部から屈曲して直線的に立ち上がる筒状を呈するいわゆる筒茶碗とよばれるもの（2-16～20、3-1～3）、強く内湾して立ち上がり半円形状を呈するもの（3-5・6）などがある。2-2・5・16・18、3-1が磁器で、くすんだ藍色の文様が施され、ほかは陶器で灰釉が施されるものが主体を占め、2-20は志野焼である。2-6・19、3-6は焼成が甘く、3-6などは釉薬が剥げ落ちている。

皿 濃淡2色の藍色で染付けされた磁器の皿（3-9）がある。ほかに、底部が盤状に平坦になり鉄釉がほどこされるもの（3-11・12）があるが、全体形が不明なので皿でない可能性もある。12の底部は糸切りとなる。

徳利 小型の徳利が1点（4-1）ある。灰釉が施されるが焼成が甘く、釉薬が剥落した部分が認められる。

蓋 返りの付いたもの（3-14）と口縁部が屈曲するもの（3-15）がある。前者は鉄釉、後者は灰釉が施される。

鉢 焼成が甘く灰釉が剥げ落ちているやや小型のもの（4-3）と、富田焼と考えられるもの（4-4）がある。

擂鉢 7点（4-6～8、5-1～4）を図化・拓影で示した。全て茶色の鉄釉が施される。

壺 口縁部が短く直立する小型のもの（4-2）がある。内面と外面の底部付近を除いた箇所に茶色の鉄釉が施される。

仏龕具 灰釉が施されるもの（3-18・19）と藍色の文様が施される磁器（3-17）がある。後者は焼成が甘く釉薬の発色がわるい。

## IV まとめ

今次調査によって検出された遺構・遺物は既に述べてきたとおりである。調査区に制約があり十分な調査ができないが、これによって得られた問題点を指摘してまとめたい。

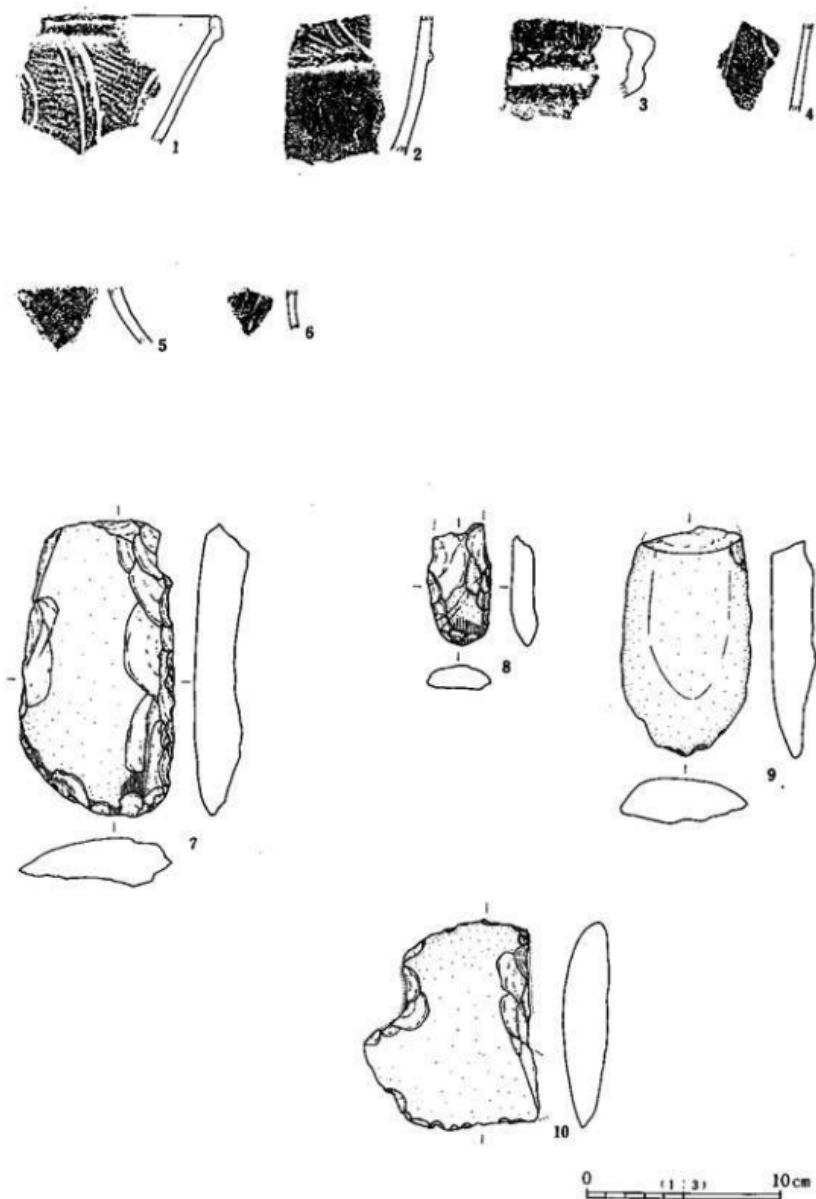
調査は農道に沿って2本のトレンチを設定し、遺構が検出された場合に拡張することにした。堅穴住居址1軒とピット・溝址が検出されたが、住居址のみ拡張し、ほかはトレンチ部分のみの調査で終了した。遺物は縄文時代・弥生時代・近世の遺物が得られたが、ほとんどは後者の時期のものである。

縄文時代は後期の土器片が出土した。学校の敷地造成で削平されているが一部に残っていた黒色土のなかに包含されていて、明確な遺構は確認できなかった。黒色土の中に土器が包含しているのは該期の一般的な傾向であり、原の城台地のどこかに良好な包含層が依存している可能性がある。

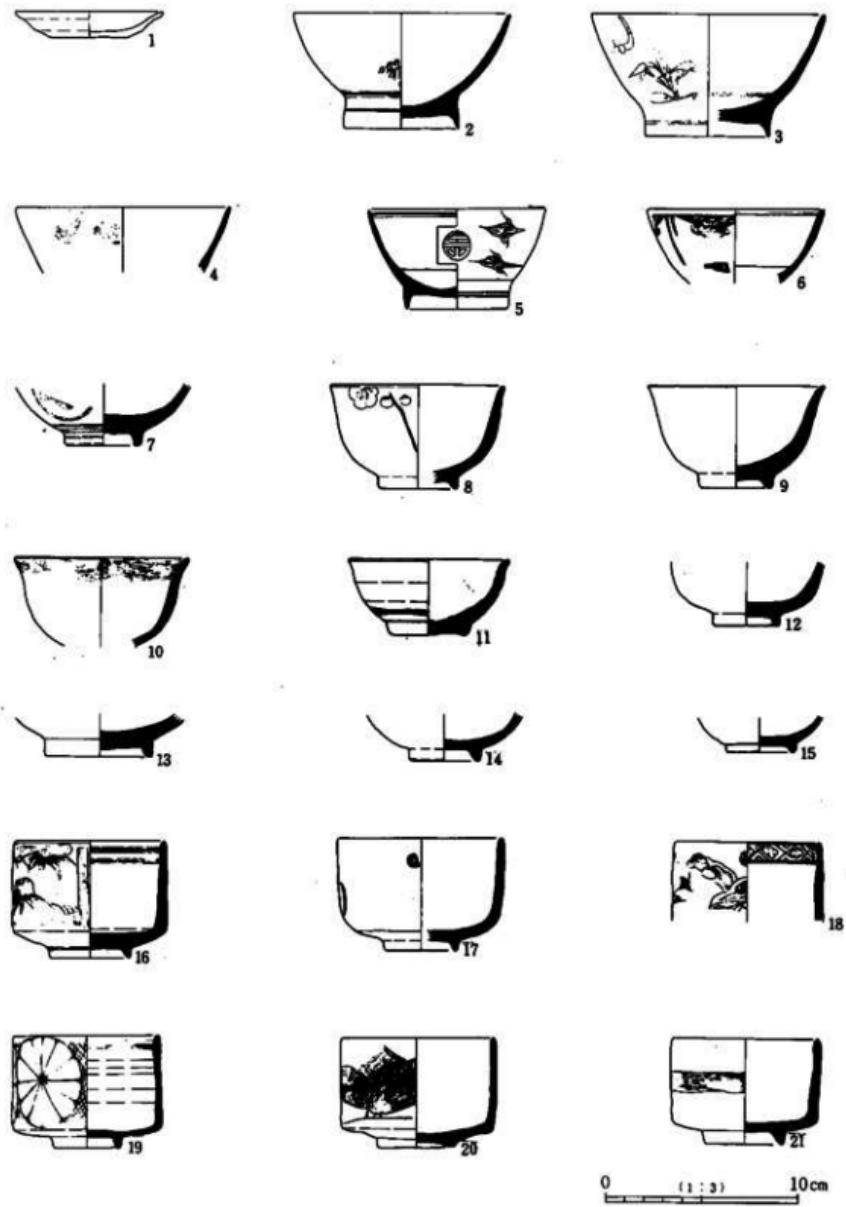
弥生時代は堅穴住居址が1軒検出された。土器片と石器が1点ずつ出土しただけなので明確な位置づけはできないが、住居址形態から後期に比定できる。1軒単独で存在するだけでなく、溝址の中からも弥生時代の石器が出土しているように、集落を構成していたと考えられる。しかし、台地の規模を考慮すれば、大集落をなすものではなく、小規模なものと考えられる。

予想外な遺構・遺物であったのが、第IIトレンチで検出した溝址とそこから出土した多量の近世陶磁器である。地形の改変を示す高い土手と落ち込みの肩の部分という調査位置から、念のためにトレンチを設定したものである。遺構自体は自然の流路であるが、多量に含まれていた陶磁器類は何を意味するものであろうか。調査者の勉強不足から、詳細な位置づけができないが、江戸時代後半から終末くらいのものと考えられる。付近に、該期の遺構などが存在したのかもしれないが、調査箇所だけでは明確に把握することはできなかった。造成などで削平されたのかもしれない。遺物自体も余り注意されてこなかった時期といえる。ともすれば、中世以前の遺物に目を奪われがちであるが、こうした遺物もこれからは重要な位置を占めてくるようになると考えられる。全てが図化できたわけがないが、基本資料としては十分に役立つと考えている。

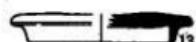
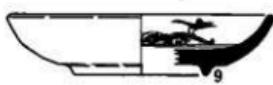
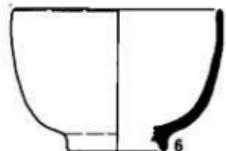
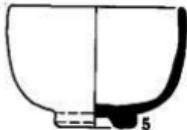
原の城が調査されたのは今回が最初となる。宅地化が急速に進んでいるため、遺跡の大部分が調査されずに壊されていくのが現状である。そうした中で、一部とはいえ発掘調査を実施し、遺跡の様相が明らかにできたのは成果といえよう。



第1図 第Iトレント(1~6)、1号住居址(7)、第IIトレント(8~10)出土遺物

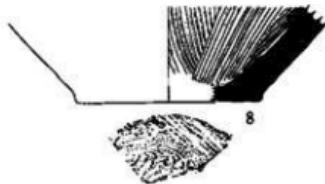
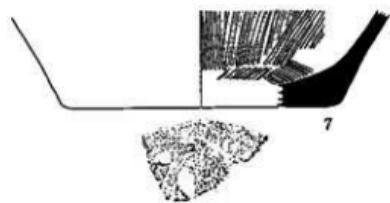
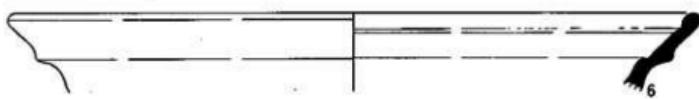
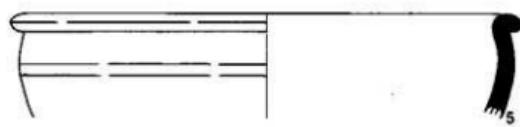
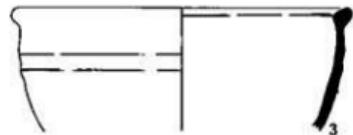
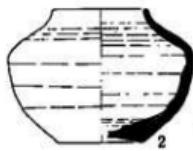
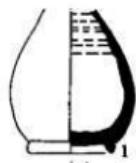


第2図 第IIトレンチ 溝址1 出土遺物(1)



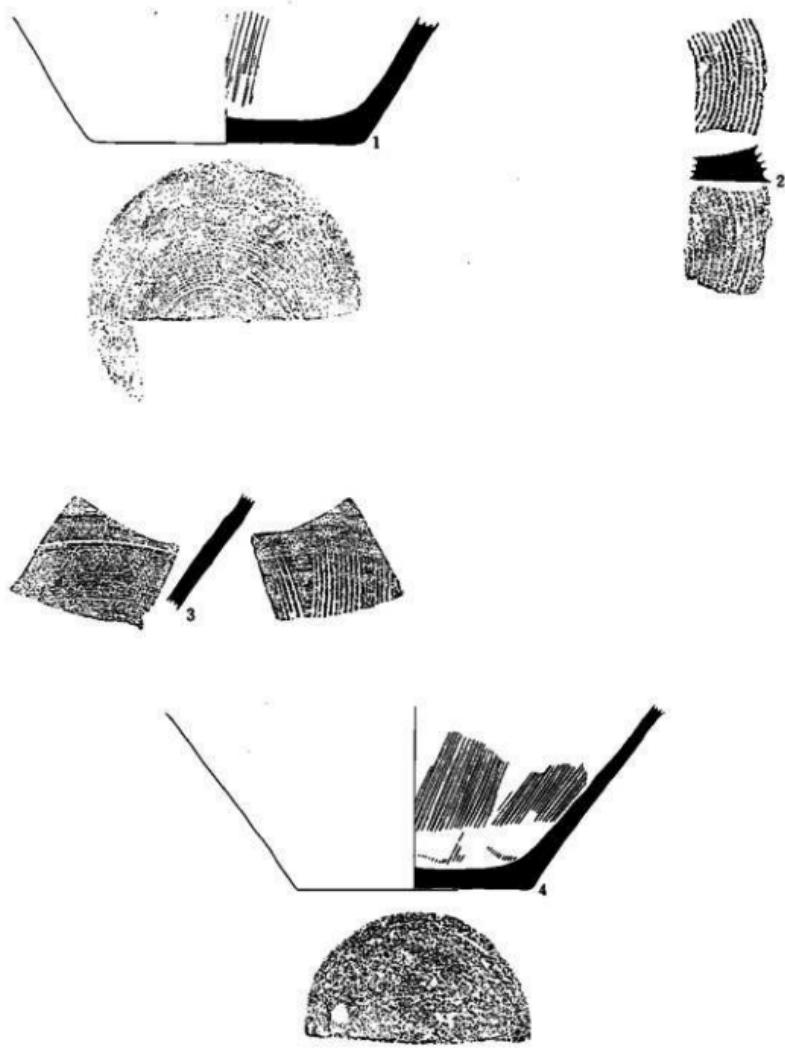
0 (1 : 3) 10 cm

第3図 第IIトレンチ 溝址1 出土遺物(2)



0 1 3 10cm

第4図 第IIトレンチ 溝址1 出土遺物(3)



0 1 : 3 10cm

第5図 第IIトレンチ 溝址1 出土遺物(4)



遺跡遠景（北西より望む）



第 I トレンチ調査前（北東から）

図版2



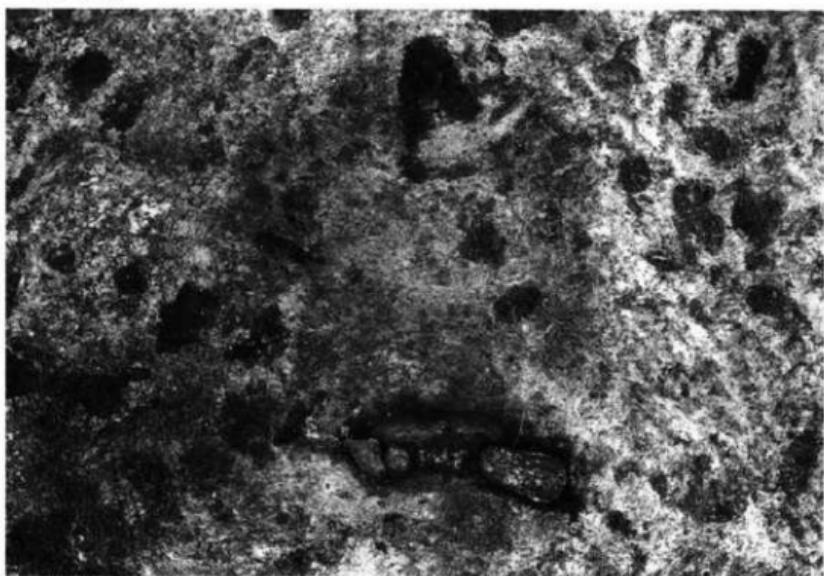
第II トレンチ調査前（北西から）



第II トレンチ調査前（南東から）

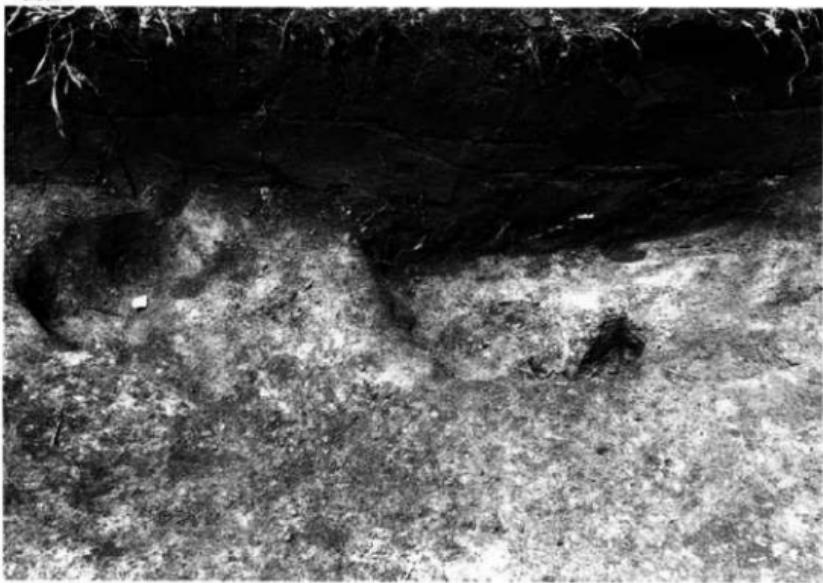


1号住居址

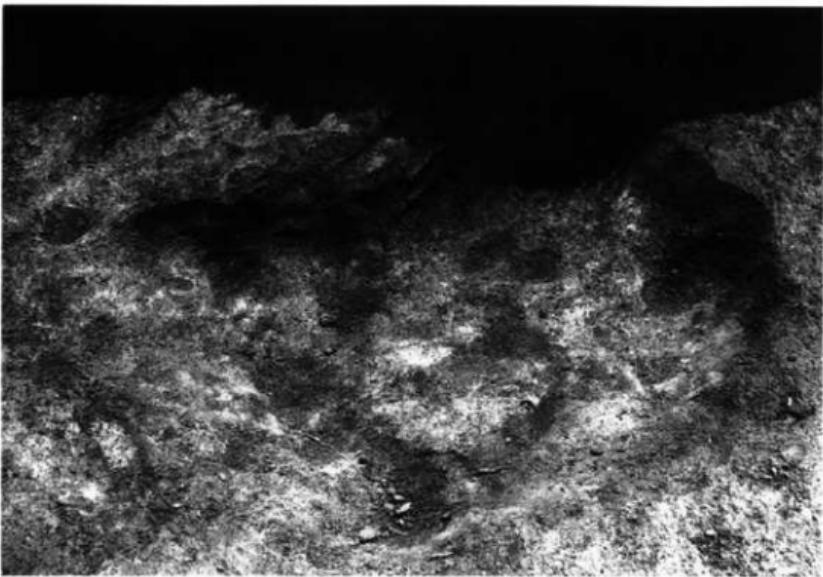


1号住居址 炉址

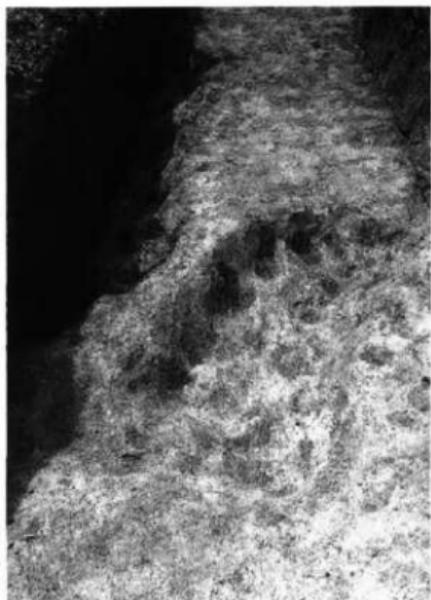
図版 4



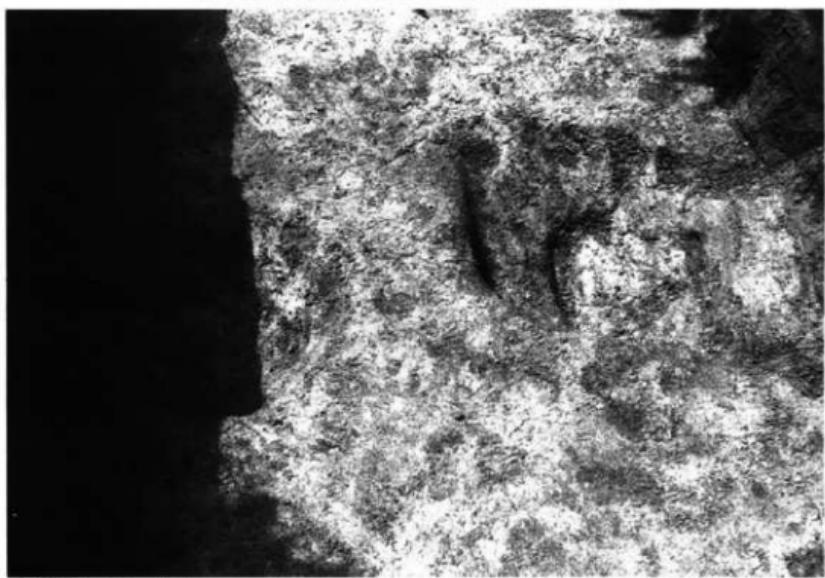
第 I トレンチ P1・P2



第 I トレンチ P3

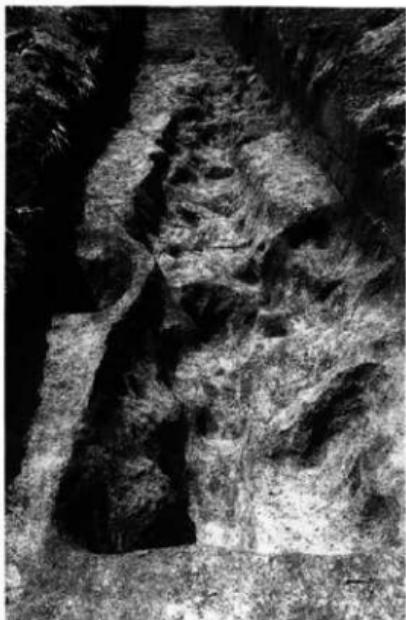


第 I トレンチ P 4



第 I トレンチ P 5

図版 6



第Ⅰトレンチ 耕作溝



第Ⅰトレンチ 全景（南西から）



第II トレンチ 溝址1（北西側）



第II トレンチ 溝址1（北西側）

図版 8



第II トレンチ 溝址1（中央部）



第II トレンチ 溝址1（部分）



第II トレンチ 溝址1（部分）



第II トレンチ（南東側）

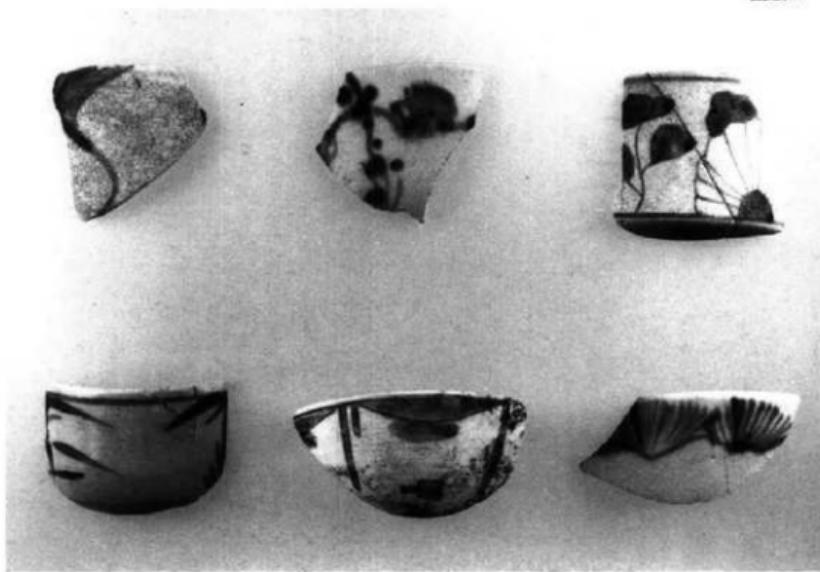
図版10



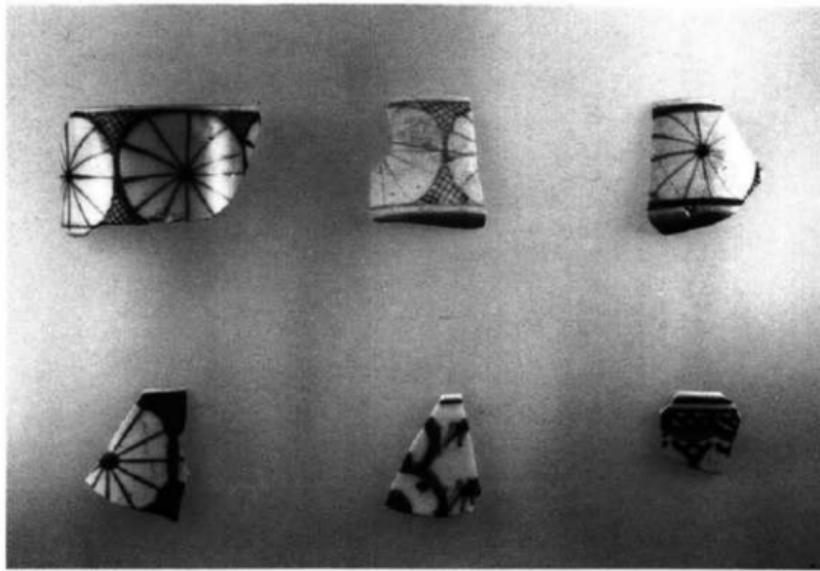
第II トレンチ（北西側）



第II トレンチ 全景（北西から）

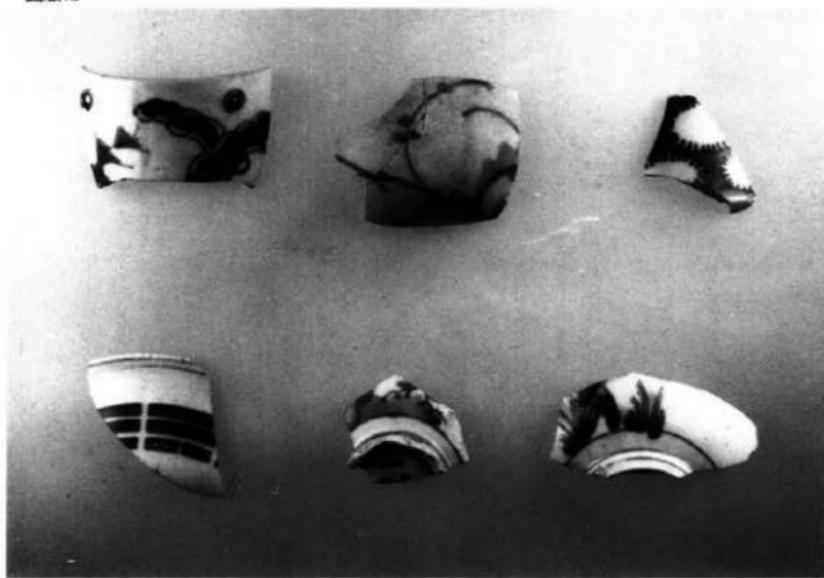


满址1 碗

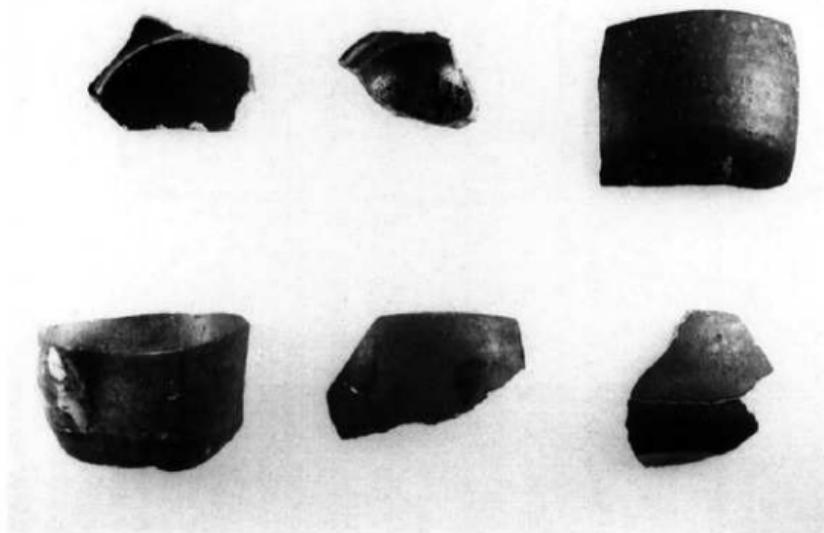


满址1 碗

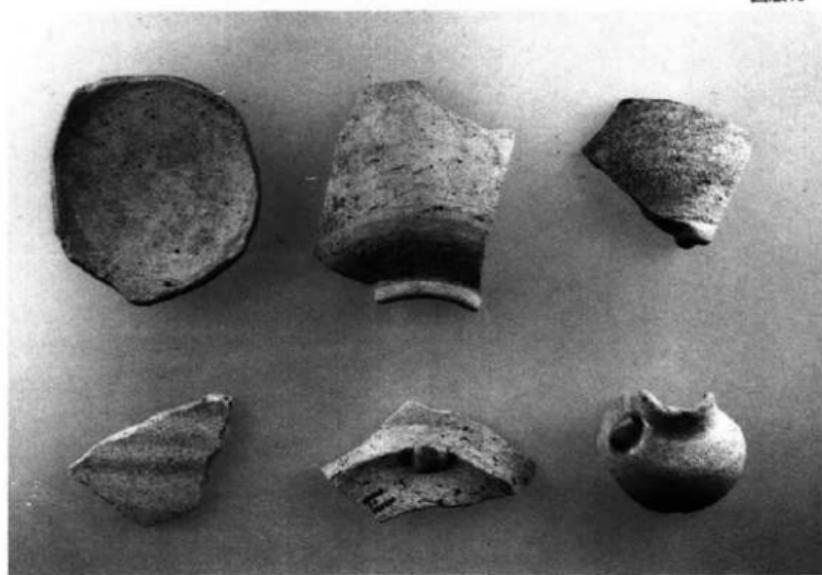
圖版12



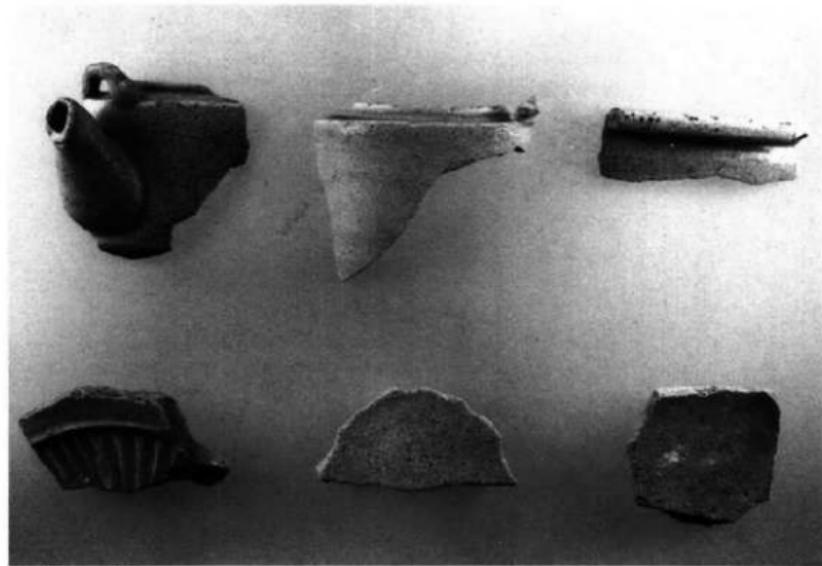
溝址 1 碗



溝址 1 碗

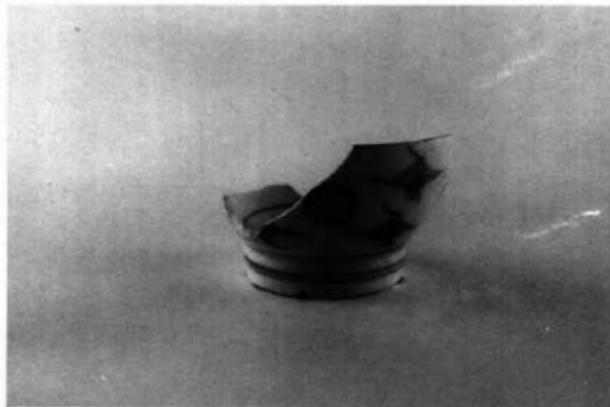


满址 1 陶器



满址 1 陶器

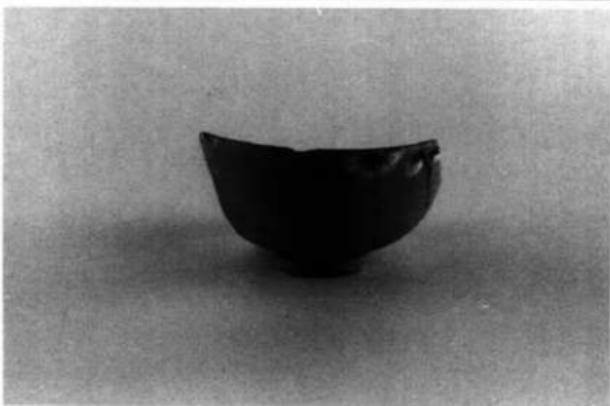
図版14



溝址1 碗



溝址1 碗



溝址1 碗

溝址1 碗



溝址1 碗



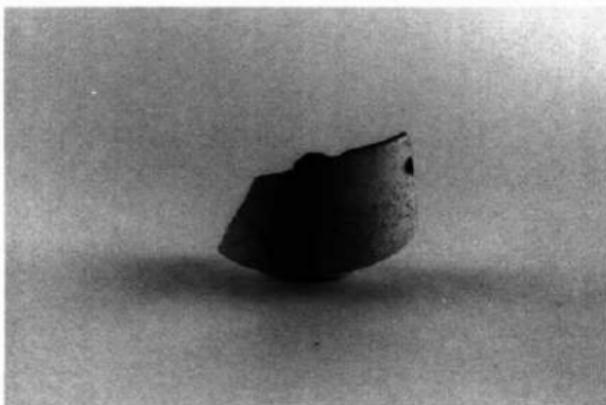
溝址1 碗



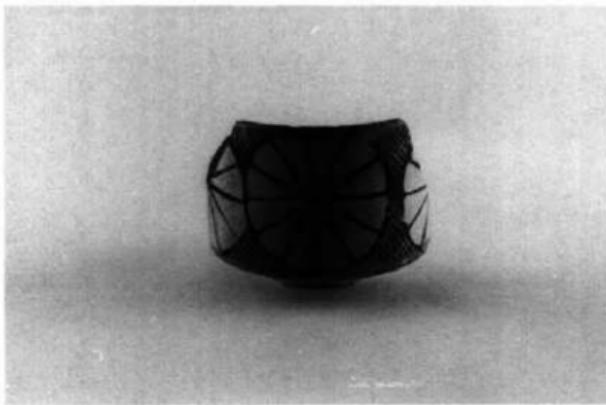
図版16



溝址 1 碗



溝址 1 碗



溝址 1 碗

溝址1 碗



溝址1 碗



溝址1 德利





溝址 1 小壺



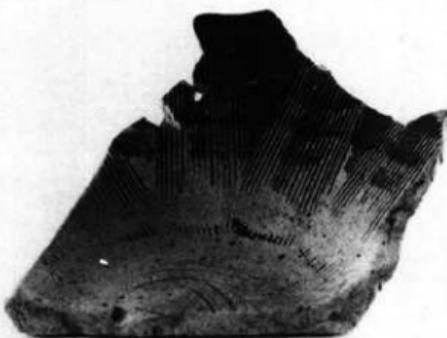
溝址 1 仏鏡具



溝址 1 仏鏡具



溝址 1 仏龕具



溝址 1 捣鉢



溝址 1 捣鉢

図版20



重機による第Ⅰトレンチ掘り下げるスナップ



第Ⅱトレンチ 調査スナップ

## 後記

農業基盤整備関連事業はここ数年来毎年のように複数の地域で実施されており、対象面積も当町にとっては比較的規模が大きいものです。一方昭和58年に調整した当町遺跡分布地図によって埋蔵文化財包蔵地を見ると69遺跡に及び、さらにこれらは広範囲に分布するので、農業基盤整備関連事業や道水路改良、民間の開発などでは多くの場合遺跡にかかることになります。

原の城A遺跡は原の城跡の一画にあり、城跡全体は発掘調査の経験をもっていないため、地下については未知のところが多かったのですが、この遺跡の調査によってその一部が明らかになりました。

調査の結果は本書に記録したとおりですが、得られた資料は当町の考古学上特に原の城跡内の一画に調査の手が入ったことを考えると大切な意義をもつものと思います。

前述のように一年間の中には複数の農業基盤整備関連事業に先だって行なうものの他、道路改良関連の埋蔵文化財発掘調査も數多く、しかもその期日も限られてくるというなかで、担当者を配置し、調査補助員を設置するなどして極力記録保存に努めていますが、充分な態勢をとることに苦慮する情況です。

きびしい調査日程の中で、担当者の努力は然ることながら、調査補助員や発掘作業に従事いただいた皆さんのご尽力に対しても厚く御礼申しあげます。

平成元年3月20日

上郷町教育委員会

---

---

上郷町埋蔵文化財発掘調査報告書 第16集

## 原の城A遺跡

—農村基盤総合整備事業原の城支線1号改良工事  
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

平成元年3月31日 発行

編集・発行／長野県下伊那郡上郷町教育委員会  
長野県下伊那郡上郷町飯沼3,092

印 刷／株式会社 興文社  
長野県飯田市馬場町2-576  
TEL 0265-22-2107

---

